チャンダナ　（所報）令和７年１月15日発行（季刊発行・第55巻　第４号）

CANDANA

No.300　2025　WINTER　中央学術研究所

てらもうでいっぷく

明日への提言

自然との共生を考える
草光　俊雄（東京大学名誉教授）…… p.2

研究ノート

西洋における「心田を耕す」伝統（Ⅴ）
綿貫　丈雄（学術研究室）…… p.7

研究所だより

学術研究室事業報告…… p.10
立正佼成会「教団史資料」の現状と今後の展開――担当者の役割とは――（Ⅲ）
金光　知子（財務グループ）…… p.12

自然との共生を考える

草光　俊雄（東京大学名誉教授）

今年2024年は異常に暑い夏が続き、11月になっても夏日が観測され、富士山の初冠雪も例年に比べて遅かった。暑さだけではなく、台風や豪雨の被害も多く、心を痛めたのは元旦に大きな地震に見舞われた能登地方が、９月に大雨による水害や土砂崩れなどに襲われたことであった。また世界に目を向けると、この秋にスペインのバレンシアとアンダルシアで起きた大洪水は何百という犠牲者を出しているし、アジアの国々でも目を覆いたくなるような悲惨な豪雨の被害がひっきりなしに報道されている。これらは確かに天災である。しかしその元凶となっているとみられる地球の温暖化は、明らかに産業革命以降の人間の活動によるものであり、物欲を限りなく追求し、自然を破壊してきたのはこの地上で人間だけであり、自分たちの生活が脅かされてきているだけではなく、大量の動植物が絶滅したり、減少したりしてきていることは、多くの科学者たちが指摘していることである。

僕はイギリスの産業革命の時代を研究の対象に選びそのためにイギリスに留学した。その頃（1970年代）の研究の動向としてはまだ「なぜイギリスが世界に先駆けて産業革命をなしとげることができたのか？」を解くことが経済史研究の大きな問いであった。「最初の産業革命」「最初の工業国家」「解き放たれたプロメテウス」そして工業化の恩恵を受けた19世紀のイギリスを「進歩の時代」などと名付け、時代を明るい社会として描き出すことが主流であった。しかし同時に産業革命の負の側面について多くの指摘があることも学ぶことになった。一つは社会構造の大きな変革であり、労働者階級の成立であった。やや図式的ではあるが、富を生み出す主体でありながら搾取によってその富を享受することができない人々の誕生である。もう一つの負の遺産は、産業革命からかなりの期間、多少の例外はあるものの、資本家たちの多くは富の追求に無我夢中であり、産業化による自然破壊には目を向けることはなかったということである。河川の汚染、森林の伐採、大気の汚染など、人々を取り巻く環境が目に見えて変化していっても、自分たちの責任を自覚せず、利益の獲得が至上命令となっていった。

産業革命は機械の発明によって労働の軽減化、単純化と生産性の向上をもたらした。労働の組織化も改良され、分業によって効率化が可能になった。１世紀以上経って、チャップリンの「モダン・タイムズ」が描くような労働者が生産過程の一つの歯車となってしまう、労働の質が問われるような事態が、そもそもの工業化の初めから生じていたことを証言する資料は多い。非人間的な資本主義に対する批判は産業革命とほぼ同時に始まっている。例えば機械打ち壊し運動として知られる「ラッダイト運動」は熟練労働者が機械によって奪われる仕事を守るた

めの闘争だったが、単なる機械反対闘争ではなかったことが知られている。化石燃料を動力として機械を駆使した工業化の道は生産力を飛躍的に高めていったが、当初からそれがもたらす自然への影響を無視してきた。

当時、工業化の気象に与える影響を早くから指摘していたのがジョン・ラスキンだった。1884年に「19世紀の嵐雲 The Storm Cloud of the Nineteenth Century」という講演を行い、自宅のある湖水地方の上空の雲に異変を感じ、そこからさほど遠距離ではない工業地帯のマンチェスターで生み出される大気汚染の影響を、長年続けてきた雲と空の観察をもとに指摘し社会批判として警告したのだった。もっとも彼の資本主義批判はすでに早い時期から始まっている。1860年に雑誌『コーンヒル･マガジン』に連載「この最後の者にも Unto this Last」を始め、アダム・スミス以来の古典派の政治経済学ならびにその基礎となった経験主義的な哲学思想と功利主義に対する批判を開始するのである。なかでもスミスの理論を発展したジェイムズ・ミルやデイヴィッド・リカード、さらに彼らの経済学を大成したジョン・スチュアート・ミルがラスキンの批判の矛先となった。この当時としては正当的な経済学を真っ向から批判した彼の論文は激しい批判にあい、連載は中断させられたが、62年に単行本として出版される。同時代の資本主義とそれを支える政治経済学は産業社会が生み出した非人間的、非社会的な側面に目をつぶるかそれを肯定することによって、困窮し社会の底辺に落ちた労働者たちを見捨てるのだ､とラスキンの筆鋒は鋭い。

かかる資本主義社会とその理論的基盤としての古典派経済学への批判を展開しながら、同時に彼は今現在の私たちにまで通底する環境問題の専門家として新たな装いを見せて登場するのである。ラスキンは若い時から自然の美について崇敬の念を抱いていた。それは彼がまだ14歳の時に、イタリア旅行の帰途スイスのシャモニーでモンブランを見て受けた霊感であった。彼のアルプスへの憧憬は単なる自然美へのそれだけではなかった。最初のモンブランとの出会いのあと、帰国してからフランスの博物学者で特に地質学や気象学を専門としていたオラース・ベネディクト・ド・ソシュールの『アルプス紀行』を読んで、アルプスの地質学の論文をものしたが、それは彼が15歳の時であった。それ以降、ラスキンは山の自然が与えてくれる美への崇敬とそれをよりよく理解するようにその美を形作っている地質学を踏まえた自然そのものの魅力を語るようになり、自然こそ神によって造形された美の究極、「地上の大聖堂」であると論じるのだ。そしてラスキンに自然が示し始めた異常な事実を突きつけたのは彼が観察していた気象の異変であった。彼は『近代画家論３巻』で、19世紀の風景画は画家たちの雲に対する注目によって特徴づけられる、と論じていたが､「19世紀の嵐雲」では工業化による公害の結果、異様な様相を示す雲の観察を報告し、その雲が生み出す大気汚染をも予測し、事態が極めて悲劇的なものであることに警鐘を鳴らす悲観的な内容になっている。ラスキンがエコロジストとして先駆的であったということはいくら強調し過ぎてもし過ぎることはないだろう。

さて、ここでラスキンから少し離れてイギリスにおける自然保護について別の側面から見てみたいと思う。イギリスには「王立野鳥保護協会 Royal Society for the Protection of Birds（RSPB）」という団体がある。文字通り、野鳥の保護を謳

っている団体であるが、設立当初には明確な目的があった。それは女性のファッションで流行していた鳥の羽根の使用を禁止させることを目的にしたもので、女性自身による運動が始まりであった。1889年にエミリー・ウィリアムスンは自宅でティーパーティを開きながら、鳥の羽根の流行が、何万という鳥たちの命を奪っていることを友人たちに訴えることで、一つの組織を作って、こうした残酷な取引とファッション産業の現実を変えなければならないことを熱心に主張して賛同者を増やしていった。そして1891年にはエッタ・レモン、エライザ・フィリップスなど情熱的にこの運動の支持者となった人々を巻き込んで、「野鳥保護協会 Society for the Protection of Birds」を設立し、会長にはポートランド侯爵夫人を選出し、夫人は1954年までなんと半世紀以上会長を務めた。彼女たちの訴えを支持する運動は次第に大きく無視できないほどになり、ヴィクトリア女王が鳥の羽根の使用を否定する考えを表明することもあり、1904年には王立の勅許 Royal を獲得し、それからは「王立野鳥保護協会」となった。また時間は経ったが、1921年には当初の目的であった羽根の取引を禁止する「羽毛輸入（禁止）法 Importation of Plumage（Prohibition）Act」の成立を見る。コサギ、カンムリカイツブリ、ハチドリなどなどの美しい装飾羽毛を持つ野鳥たちが存在そのものの限界まで採集され、アメリカやヨーロッパのファッション産業によって消費された。その数は20世紀の初めでその数600万キロ、値にすると今日の価格で20億ポンド（約3800億円）という巨額の金額が取引されていた。これはロンドンだけでの数字なので実際はこの何倍もの量の取引が行われていた。

イギリスの王立野鳥保護協会の活躍を見ていて興味深いのは、野鳥保護の運動を率先し働いていたのが女性たちだったということである。もちろん後から男性が加わって実質的な働きをしたことには相違ないが、お茶会の席で、今時のファッションで貴重な野鳥の飾り羽が使われているのは許せない自然破壊であると、次第に同じ志の女性たちの輪を広げていき、一つの団体を設立したことには尊敬の念を禁じ得ない。

実は僕はイギリスで RSPB のメンバーだった。これは誰でも簡単にメンバーになることができる。父親が日本で野鳥の会に入って探鳥会に出かけて楽しんでいることを聞いて、僕も鳥のことをもっと知りたいと手っ取り早く入会できる RSPB のメンバーになり、そのロンドン支部が行なっている探鳥会などに参加しながら鳥の名前などを覚えていった。僕はそのほかにも「英国鳥類研究団体 British Trust for Ornithology」のメンバーにもなったが、これは動物学の分野としての鳥類学研究の団体で、僕のような素人ができるのは、年に一回数キロメートル四方の土地にどのような野鳥がどれだけ見られるか、といった調査の結果を本部に送って、それを基に、野鳥の国勢調査のようなものを作る手伝いをするくらいなのだが、逆にいうと鳥類学の研究はアマチュアのこうした貢献なしには成り立たないところがある。

RSPB は19世紀の後半に成立し、羽毛を集めてファッションとして売りに出すような産業に反対することになったが、野鳥保護をもう少し広げて考えると、やはり人間の勝手な思惑のために種の存続の危機に陥ることが多々見られた。例えばイギリスでは貴族の趣味として狩猟が重要なものとして存在するが、今でも人気のある狩猟は雷鳥狩りとキジ狩りである。雷鳥はもともとイングランドやスコ

ットランドなどでは生来の野鳥なので、ゲームキーパーなどによって貴族自らの土地を管理しながら、鳥の数を維持させることができたが、キジの場合、もともと多くのキジは狩猟のために輸入されたものであり、キジの個数を増やし維持していくために、キジの天敵である野鳥、例えば鷹類の野鳥、狐などの動物などを排斥しなければならず、システマティックな駆除のために、多くの野鳥が殺戮されることが起きて、自然界の鳥類のバランスが大きく崩れてしまうといったことが起きた。これは一部の特権階級の趣味のために生態系の危機が生じる例であるが、今日では気象危機が多くの動植物の生存を危うくしており、人類が産みだした地球の温暖化が後戻りできない事態となってしまっていることは周知のことであろう。我が国でも、コウノトリやトキの例を見るように国内では絶滅した野鳥の復活の努力がされており、かろうじて成果が上がっているかに見えるが、鳥たちの未来は必ずしも明るいとは言えない。レイチェル・カーソンが『沈黙の春』で明らかにしたDDTによる動植物への影響は、本来なら鳥たちのさえずりが満ちている自然世界が生命の息吹が失われた沈黙の世界に変わってしまったという黙示録的な現実を示していた。ラスキン自身カーソンよりはるか昔に『この最後の者にも』のなかで次のような予言のような言葉を書いている。「沈黙する大気というのは心地よくない。大気は低い音のかすかな流れ――小鳥のさえずり、昆虫のかすかな羽音や鳴き声、大人の太い調子の言葉、子供の気ままな甲高い声――に満ちていてこそ心地よいものなのだ。すべての愛らしいものもまた必要なことがようやく分かるようになるだろう。栽培される穀物と同じように路傍の野の花も、また飼育される家畜と同じように野鳥や森の動物も必要なことが。人はパンのみにて生きるものではないのだから」。自然に耳をすませばそこに生きているものたちの息吹が感じられる。小鳥のさえずり、虫の羽音などはなくてはならない自然の一部である。ラスキンはそうした自然が失われることがないように警鐘を鳴らし続けたのである。

最後にここで自然を観察し、何よりも自然の驚異を身をもって体感し、地道な研究を続けることがそのまま自然保護へと形を成していった日本が誇るべき南方熊楠（みなかたくまぐす）について明日の世界を見据えるためにぜひ紹介しておきたい。あまりにも偉大な南方の研究者としての実力について僕などが云々することはできないが、欧米での長年にわたる研究生活を踏まえた、東西の極めて博学な知識を縦横に駆使した比較研究の優れた仕事と共に、特に帰国してから熊野の自然にとりくむなかで展開していった粘菌類の研究などから生み出された、自然が十全にその存在を全うするからこそ可能となるすべての生きるものが関係しあっている、「南方曼荼羅」的な世界を、南方は描いていった。南方は神社合祀によって縮小された森林を伐採しようとする国家による自然破壊に断固として反対の声をあげ、かろうじて残る神社を支えていた自然林の保護に情熱を捧げたのである。

ラスキンによる自然破壊への警告は産業・工業社会が生み出す公害に対する糾弾であったが、南方熊楠の場合は、工業化への批判には直接は言及していなかったかもしれないが、人間のみならず自然世界を支えている根本を破壊しようとする理不尽な人間による行動への批判であった。また「王立野鳥保護協会」の出発の原点は、商業主義的なファッション産業による利益追求のための野鳥の大量殺

戮であったが、これも現代社会の矛盾を暴き出す根源的な戦いであった。われわれの周りの自然を享受し、その恩恵によって生きていることを思えば思うほど、その恵みへの理解の不足、自然の破壊をもたらすものへの批判と保全は、自分たちの子孫にたいする現在生きる一人ひとりの責任である。自然保護には妥協はありえない。ちょうどこの原稿を書いているときに、世界の200余国の代表たちが集まって「国連気候変動枠組条約第29回締約国会議COP29」がアゼルバイジャンのバクーで開催されていたが、化石燃料を産出する国は地球温暖化の最大の原因ともされる化石燃料生産の制限には消極的であった。アメリカの次期大統領に選出されたアメリカ第一主義のドナルド・トランプは地球の気象変動などどこ吹く風と言わんばかりに化石燃料の生産を推し進めると公約し、結局自分たちの首を絞めるところの労働者たちも、生活第一という理由でトランプを支持した。自然保護と経済とのバランスをとったときに多くの人は経済に賛同する。しかしラスキンが『この最後の者にも』で主張したのは、このような経済万能、利益追求型の考え方そのものに対する異議申し立てであった。僕もラスキンの考え方に賛同する。豊かな社会を謳い経済第一の政治を目指すというような考えが多いが、僕はそう思わない。豊かさが自然の破壊の上に成立しているような社会は根本的に間違っているのだと思う。僕の「明日への提言」は自然を大切にし、自然からもたらされる幸を有り難く享受しながら、毎日の生活を大事にしようということである。

（この文章を書くにあたって富士川義之先生のエッセイ「危機の時代を生きるラスキン―代表的なエコロジスト―」（『ラスキン文庫たより』第85号、2023）などを参考にした）。

◆プロフィール◆

草光　俊雄（くさみつ　としお）　（1946年生）

慶應義塾大学経済学部卒業；慶應義塾大学院経済学研究科修士課程修了；英国シェフィールド大学博士課程修了（社会経済史）PhD 取得；ジョゼフ・ニーダム研究所（英国ケンブリッジ）研究員；上智大学、日本女子大学、東京大学、放送大学を経て現在東京大学名誉教授；博士号は英国の産業革命とデザインについて主に繊維産業について調べた。今は広く日英の社会史、文化史を中心に学んでいる；王立歴史学協会（Royal Historical Society）フェロー、ラスキン文庫理事、鎌倉ペンクラブ幹事。

著書は『明け方のホルン』小沢書店、1991、みすず書房、2006；『歴史の工房―英国で学んだこと』みすず書房、2016；草光、近藤和彦、松村高夫、斉藤修編、『英国をみる―歴史と社会』リブロポート、1991；草光、小林康夫編、『未来のなかの中世』東京大学出版会、1997；草光、都築忠七、ゴードン・ダニエルス編『日英交流史1600～2000、第５巻社会文化』東京大学出版会、2001

“Great Exhibitions before 1851”, *History Workshop Journal*, no.9, 1980; “British industrialisation and design before the Great Exhibition”, *Textile History*, Vol.12, 1981: “Consuming plants: botany and consumer society”, A.J.H.Latham and Heita Kawakatsu (eds), *Asia and the History of the International Economy: Essays in Memory of Peter Mathias*, Routledge, 2018

西洋における「心田を耕す」伝統（V）

綿貫　丈雄（学術研究室）

本でも読んで気を紛らかそうと思って、革鞄（かばん）を開けて［…］底の方から、手に障（さわ）った奴を何でも構わず引き出すと、読んでも解らないベイコンの論文集が出た。

———夏目漱石『三四郎』

かつてキケロは「精神の耕作が哲学である」と唱えた。その源流をさかのぼると、「ソクラテスの治療薬」によって魂をケアし、心を向けかえる、〈生き方としての哲学〉にたどりつく。

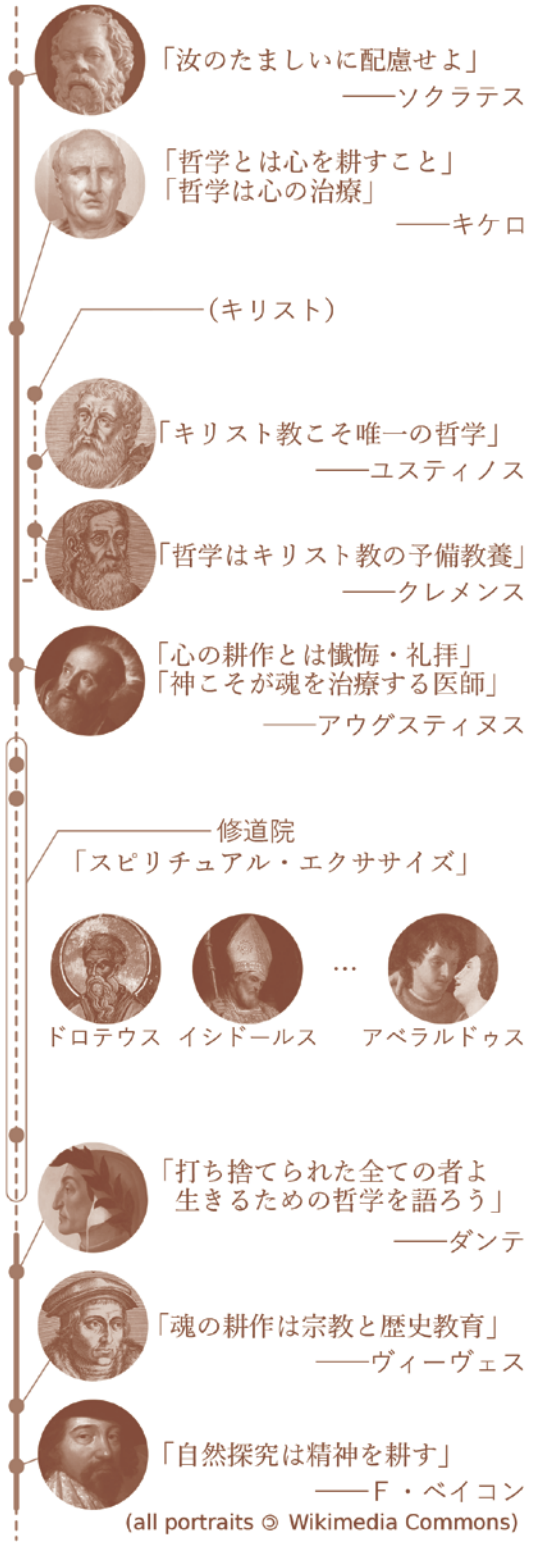
一方、キリスト教が興隆すると、古代ギリシア哲学は、正しき信仰に導くための「予備教養」に位置付けられ、キリスト教こそ唯一確実な哲学とされた。とりわけ、生涯をかけてキリスト教信仰を深めたアウグスティヌスは、心の耕作を懺悔・礼拝に、魂の医師を神に求めた。

やがて古代ギリシア・ローマの哲学も、その大半が西欧世界から忘れ去られてしまう。しかしその精神に立脚した行動様式は、聖典を読誦し教説を受持する修道士たちが、「スピリチュアル・エクササイズ」として、脈々と継承していった。

後に、アラビア文化圏を経由して、再び古代の諸学芸が西欧に流れ込むと、ソクラテス＝キケロ的な人生哲学はキリスト教的修養の土壌へと合流し、限られた神学者の専有物としてではなく、広く世俗の王侯貴族、さらには万民のもとへと浸透してゆく。ダンテがキケロに倣（なら）って母国語で哲学を語れば、ヴィーヴェスは英国で、宗教と歴史によって「心を耕す」教育カリキュラムを確立した。

こうして、近世あるいは初期近代に差し掛かったころ、この伝統は大きく方向転換することになる。その舵を切ったのが、フランシス・ベイコン（Francis Bacon, 1561-1626）である。

図　西洋における「心田を耕す」伝統の系譜



(all portraits ⓒ Wikimedia Commons)

8　フランシス・ベイコン

8.1　権威への疑問と学問改革

王室に仕える当代きっての名門一族に生を享け、教養あふれる家庭に育ったフランシスは幼くして才気煥発、エリザベス女王のおぼえもめでたく若干12歳でケンブリッジに進む。

しかし、コペルニクスやガリレオ、ケプラーたちの没後まもない時代にあっても、トリニティ・コレッジのカリキュラムはいまだ古式泰然としていた。ティコ・ブラーエの超新星がカシオペアで輝きを増し、天球の星座を不変とするアリストテレス＝スコラ学の権威は失墜した頃である。

金科玉条の格言や教条を起点に三段論法を連ねる演繹法は、これまで自明の理とされた多くの前提に疑義が生じるとき、導出される知識がもはや真である確証はない。失望したベイコンは、在学中から「学問の大いなる革新」を構想し始める。推論の前提や結論を検証する実験と、「真の帰納法」からなる新しい哲学体系である。

「古い帰納法」は事実の単純枚挙に終始しており、これに基づく推測は、過去の経験という予断に縛られた論理の飛躍でしかない。対して「真の帰納法」は、既成概念が「反例」によって否定されうるかを検証し、観察事実の蒐集と実験結果の蓄積を必然的に要請する。

この帰納と演繹が相互に補完し合う方法論こそ、学問の「反証可能性」を担保する「大いなる革新」だったのである。

8.2　心の分析

しかしながら、そうはいってもこの構想が、そう易々と受け入れられるとは思えない。真理の探求には、人間の知性の脆（もろ）さ、心の歪（ゆが）みが障壁となるからだ。

心（mind）の「知性」「意志」「欲求」「情緒」などを、ベイコンは博物誌さながら様々に観察・分類したが、これらすべての機能は本来的に不健康であり、放っておくと病にかかりやすい。この、現代でいうところの認知機能を詳細に分析した上で、それぞれの症状に対処するための治療法や修復法、いわば「知の技法」を処方していった。

その典型的な症例の一つに、「自己崇拝」がある。人間は「己の精神と知性に対する過度の尊敬と一種の崇拝ゆえに」、「自然の探求や経験的観察を放棄」し、「勝手な理屈をこねては混乱する」のだ。

あるいは「乱れた判断力」という病弊もある。「疑問を抱くのがもどかしく、真偽の判定を急ぐあまり、機が熟せずに判断を下してしまう心」は、もっともらしい意見や、権威ある命題を鵜呑みにしてしまう。

8.3　心の治療と徳目の涵養

これら「あらゆる心の病気」に対して、「学問が与える治療法」には、理性的かつ道徳的なアプローチが提示される。

「自己崇拝」を克服するには、神の被造物である自然という「書物」を、忍耐強く、謙虚に、実験的に精読すること。

「乱れた判断力」を調御するには、真偽の判定を適度に留保して性急な心を諌め、必要に応じて実験を試み、情報を十分に吟味して軽信を戒めることである。

学問は、あらゆる知的能力において**心のエクササイズ**となり、これを繰り返すことで心の習慣を向けかえられる。つまり「知の技法」を実験によって涵養することが、忍耐・謙虚・信仰心といった道徳的・宗教的な精神の耕作と循環しているのだ。

8.4　自然探求で心を耕す

なかでも特筆すべきは、心の治療と人格形成の中心に、**博物誌的自然哲学**を据えた点であろう。自然の継続的な探求は、忍耐と謙虚さを培う実践であり、自己崇拝を阻止し、心の散乱を自制する、「精神の耕作」に最適な手段なのである。

探求の道筋さえ正しければ、観察と実験による「世界の踏査」を通じ、神の作品たる自然の細部に心を寄せることもできる。ベイコンにとって自然探求とは、判断・感情など、意識下の自己をコントロールするエクササイズでもあった。

かくしてベイコンは、自然探求に、人格的徳目という概念を持ち込んだ。彼に帰せられる「知（*scientia*）は力（*potentia*）なり」の標語も、この文脈で捉え直さねばならぬ。

同時に見落としてならない重要な視点がある。神の「被造物という著作」を解読して心の憂いを晴らしたいなら、これを可能にするのは、慈善や共通善への奉仕という「正しい動機」と、「心の謙虚さ」を培うことである――とベイコンはいう。

数ある心の制御法のなかでも、〈慈善活動〉が最高の〈精神の耕作〉になり、〈慈善活動〉だけが、哲学的・道徳的・宗教的なすべての徳目を、一括して心に形成できるのだ。生き方としての哲学と、キリスト教の慈善・博愛とが合流して確立された人文主義（ヒューマニズム）の伝統は、ベイコンによって初めて、自然探求という新たな領域へと漕ぎ出したのだ。

少年時代から好学的だったベイコンであるが、周囲からの期待に沿う形で法律家としては検事総長、政治家としては貴族院議長と目覚ましいキャリアを積んでいった。大法官にまで上り詰める傍（かたわら）にも、学問への深い関心は継続し、母国語たる英語で『随筆集』や『学問の進歩』を出版、またラテン語で「自然の解明」「新しい方法論（ノヴム・オルガヌム）」「自然誌と実験誌」等の論考を次々に執筆していった。

晩年、収賄罪に問われて罰金刑ならびに禁固刑に処せられ、すべての官職と社会的地位を奪われてしまう。もっとも、ロンドン塔から釈放された後には、かえって自然探究や博物誌に没頭できたようだ。ある冬の日、肉は塩漬けにせずとも雪で保存できはしないかと、内蔵を抜いた雌鶏の腹に雪を詰めて実験を試みた。これで体を冷やしたのか風邪を拗（こじ）らせ、数日後に亡くなった。

そんなベイコンが隠遁の余生で取り組んだ作品に、架空の実験研究機関を描いたSFユートピア小説がある。ベイコンには自然誌の同好の士も共同研究者もいなかったが、これが遺言の役割を果たし、没後、17世紀イギリスには「インヴィジヴル・コレッジ」や「王認学会（ロイヤル・ソサイアティ）」など、多くの愛好家が集う共同研究機関が隆盛を極めることとなる。　（つづく）

主要参考文献

The Works of Francis Bacon, J. von Spedding, *et al*. Ed., 14 vols. 1857-74.

The Works by Fransis Bacon, Project Gutenberg.

Clark, Andrew, Ed., '*Brief Lives' by John Aubrey*, vol. I, Clarendon（1898）.［抄訳：オーブリー『名士小伝』富山房、1979年］

Corneanu, Sorana, *Regimens of Mind: Cultura Animi Tradition*, 2011.

服部英次郎・多田英次『ベーコン』（世界の大思想６）河出書房、1966年。

成田成寿『ベーコン』（世界の名著20）中央公論社、1970年。

令和５年度　学術研究室事業報告（概略）

（紙幅の関係で詳細は省かせていただきました）

１．研究
⑴開祖研究
①基本計画策定
ア．「開祖さま研究」スタッフ打ち合わせ
②釈尊と法華経研究会
ア．定例研究会開催
⑵佼成教学の研究
①在家仏教の研究
ア．研究会開催
イ．学習会開催
㈠「仏教思想論文献講読会」（Ⅰ）開催
㈡「仏教思想論文献講読会」（Ⅱ）開催
㈢「仏教思想論文献研究会」開催
㈣「信仰生活者研究会」開催
ウ．定学の研究
㈠禅研究会参加
エ．レポート作成
㈠立正佼成会の可能性の中心－その理念と実際－
㈡「信仰生活者」研究会の発足に際して―仏教教理学を「行道」から再組織化するために―
㈢パーリ律および四ニカーヤ（*KN.*を除く）における「法眼」（dhamma cakkhu）の出典調査
㈣『*DHARMA WORLD*』2023年秋号・巻頭言：‘The Place of Religion and the Individual in the Home in Rissho Kosei-kai’
㈤『*DHARMA WORLD*』2023年秋号・寄稿論文：‘The Evolving Concept of Family in Renunciant Communities’
㈥「家を捨てた釈尊のサンガ―介護と葬送・阿羅漢塔を中心として―」
②原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究
ア．「初期経典自身が語る　釈尊の生涯とサンガの生活」の原稿作成
イ．ホームページの随時点検作業
⑶教団史研究
①教団史研究会
ア．『創立80年史』（仮称）研究会開催
イ．史料編纂打ち合わせ
ウ．寄贈資料・収集資料の調査研究とデジタル化（随時）
エ．東日本大震災に関する聞き取り・資料調査
②アーカイブズ
ア．アーカイブズ推進委員会
イ．「立正佼成会デジタルアーカイブ」構築に伴う共同業務
ウ．調査・研究（神奈川大学大学院への通学：會澤室員）
③教団史研究
ア．関係者の聞き取り
イ．教学研究関係
ウ．イブニングセミナー実施
⑷布教研究
①宗制・宗憲に関する基礎研究
②法華研究会
ア．研究成果・学会発表など
㈠文部科学省の外郭団体である日本学術振興会から、文部科学省科学研究費基盤Ｃ（一般）研究として、これまでに推進してきた一連の法華研究が指定され、これを継続（2025年度まで）
㈡“Verification of the *Saddharmapuṇḍarīka* Manuscripts’ Sanskritization, and Research Methods of the *Saddharmapuṇḍarīka* Using ICT Linguistic Analysis”（ICT 言語解析による梵文法華経写本における梵語化検証と研究手法）”を『中央学術研究所紀要』52号：P179～P199に寄稿・掲載
㈢国際サンスクリット学会第18回学術会議（国立オーストリア大学・オンラインZoom開催、１月９日）にて、“A Contrastive Study Method of the Sanskrit Lotus Sutra, the *Saddharmapuṇḍarīka* and the Chinese Lotus Sutra, the Myōhō-renge-kyō, Using ICT Linguistic Analysis（梵文法華経と『妙法蓮華経』における ICT を用いた対照研究法）”と題して発表
㈣日本印度学仏教学会第74回学術大会（龍谷大学・オンラインZoom開催、９月３日）にて、「梵文法華経写本に出現する *evam eva*」と題して発表し、『印度學仏教學研究』第72巻第３号へ上記の発表した内容を“*Evam Eva* in the *Saddharmapuṇḍarīka*”として寄稿
㈤日本宗教学会第82回学術大会（東京外国語大学、９月10日）にて、「梵文法華経と他仏典のレーベンシュタイン法による比較検討」と題して発表
㈥Institute of Mediterranean and Oriental Cultures Polish Academy of Sciences（ポーランド科学アカデミー・地中海東洋文化研究所）の編集委員から *ACTA ASIATICA*

*VARSOVIENSIA 36*に掲載する論文査読を依頼され、その査読報告書を作成・提出（10月15日）

㈠～㈩　西康友主幹

イ.「梵文法華経と漢訳法華経の研究ウェブサイト」(A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra:https://www.cari-saddharmapundarika.com/)、および Academia.edu（https://min-jp.academia.edu/YasutomoNISHI)、researchmap（https://researchmap.jp/YasutomoNISHI)、ResearchGate（https://www.researchgate.net/profile/Yasutomo-Nishi）等へ研究業績の情報等を更新

③布教モデルの研究

⑸法華経観に基づく社会・政策研究

①「メッセージ検討チーム」事務局

ア. 研究会の開催

②環境問題研究会（宗教・研究者エコイニシアティブ）

ア. 月例運営委員会

イ. 第３回環境学習会「世界の食糧安全保障とわが国の食と農のありかた」(12月11日）参加

③平和問題研究会(Rissho kosei-kai Peace Task force)

④現代宗教研究会

ア. 宗教専門新聞による世界平和統一家庭連合（旧統一教会）関連記事の情報収集

イ. 教団付置研究所懇話会宗教間対話研究部会への「旧統一教会問題に対する発信決議についての意見書」とこの口頭説明文の作成

⑤宗教間対話研究会

２. 出版事業

⑴研究関連出版

①『中央学術研究所紀要』第52号の発行（11月15日）

②印度学・仏教学研究誌の発行

ア. *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* 研究と出版

㈠言語解析プログラム開発と更新

㈡ *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* 第８号の発刊

㈢ *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* の WEB サイトの更新

㈣ CANDANA第292号「研究所ニュース」欄に「*Philosophica Mahāyāna Buddhica*第７号を発刊」と題する研究成果報告を掲載

③『アーユスの森新書』の発行

④『チャンダナ』の発行

⑵特別出版

① WEB 発信

ア. 研究所ホームページ「お知らせ(Informations)」コーナーに最新情報を逐次更新

イ. 令和４年度の『紀要』電子ジャーナルを公開

ウ.『チャンダナ』各号の「明日への提言」をホームページに公開

３. 協力助成

⑴研究員助成

３人の研究員（職員）に対し、各所属の学会費を助成

⑵学者・研究者および外部機関の研究活動への協力

㈠第21回年次大会（10月31日）参加

ア. 宗教間対話研究部会

㈠第３回宗教間対話研究部会（２月27日）参加

イ. 生命倫理研究部会

ウ. 自死問題研究部会

エ. 宗教と法律研究部会

②諸宗教研究機関との交流

ア. 国際宗教研究所宗教情報リサーチセンターとの新年会（２月１日）

イ. 2022年度（公財）国際宗教研究所シンポジウム（２月18日）への参加

ウ. 公益財団法人庭野平和財団シンポジウム（２月１日）の参加

エ. 国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター25周年記念シンポジウム（12月２日）参加

③各種学会・研究会へ加入および参加

ア. 現代における宗教の役割研究会第69回研究会議（３月15日）参加

イ. 日本印度学仏教学会令和５年度定例理事会（８月27日）参加

ウ. 国際サンスクリット学会第18回学術会議（１月９日）参加

エ. 日本印度学仏教学会第74回学術大会（９月３日）参加

オ. 日本宗教学会第82回学術大会（９月９日）参加

カ. 仏教伝道協会主催「新仏教教団を学ぼう」連続講座（11月８日）参加

キ. 第75回日蓮宗教学研究発表大会(11月９日）参加

⑶海外諸宗教研究機関との学術交流

① KAICIID 関係ほか

②カトリック・聖エジディオ共同体関係

⑷客員研究員関係

①「人間と科学」研究大会開催支援

ア.「人間と科学」研究学会第33回研究大会は令和６年１月14日に順延

イ.『人間と科学』第30号を発行（３月）

立正佼成会「教団史資料」の現状と今後の展望 －担当者の役割とは－（Ⅲ）（2023年度アーカイブズカレッジ（短期コース）修了論文）

金光　知子（財務グループ）

（1）配架の改善

このような出来事から、資料の整理方法の改善を考えるようになった。はじめに行ったことは、書架の配列からもんじょ箱の位置づけを明らかにする作業である。

［写真１］は、2021年時点でのもんじょ箱の配列である。箱には手書きで「○○関係資料」といったように、大まかな名称のみ記載されていた。そこで［写真２］のように、書架に配架番号[11]を記した強力マグネットで表示し、もんじょ箱には同じ配架番号を記したラベルを貼付した。

［写真１］ラベル貼付前　　［写真２］ラベル貼付後

この作業の結果、業務年数の長短に関わらず、誰もがリストに記載されている資料の配架場所にたどり着け、数箱同時に取り出しても間違えることなく定位置に戻すことが可能になった。

（2）デジタルアーカイブに資するメタデータの付与

また、佼成会では「立正佼成会デジタルアーカイブ」のweb公開を2023年５月に開始した[12]。それに先立ち教団史資料の一部も閲覧に供すべく、デジタルアーカイブの世界基準であるIIIFに準拠したメタデータの簡易入力を試験的に始めている。作業を進めるなかで［写真３］のような搬入されたまま未整理の資料を発見することがあった。そのため、簡易データ入力（ID・タイトル・形態など）を行ったうえでデジタル化（TIFF／PDF）を行っている。同時にクリップやステープラーを外し、麻糸や紙こよりで綴じるなどの保存処置を施した。さらに［写真４］のように封筒に入れ、IDラベルを添付し［写真５］、一覧リストを箱内に入れることにした。

［写真３］未整理の個人資料

［写真４］整理後の個人資料

［写真５］ラベル貼付

資料の詳細な情報は、データベースのIDとPDFを紐づけして確認した際に追加している。これにより、データベースで検索した資料と資料の所在が明確になり、実務経験が浅い担当者であってもスムーズに当該資料へたどりつける。

[11]「排架法」とは、書架上に図書館資料を配列する方法のことをさす（日本図書館協会用語委員会編『図書館用語集　四訂版』日本図書館協会、2013年、540頁）。

[12]立正佼成会デジタルアーカイブ〈https://archive.kosei-kai.or.jp/〉（2023.12.5閲覧）

299号の註９にて誤りがございました。お詫びして訂正いたします。
（誤）廣瀬幾代 →（正）廣瀬幾世

「お知らせ」

宗教に関する社会情報や学術的情報を収集・分析し、広く一般に公開する「宗教情報リサーチセンター（RIRC、通称「ラーク」）では、YouTube「RIRCチャンネル－『宗教ニュースを読み解く』－」を開設しています。センター長とRIRCの現研究員・元研究員や特別ゲストが対談して、最近の国内外の宗教ニュースから重要なものを選んで解説し、さらにそのニュースの背後にある宗教や宗教文化の基本的な用語についても説明しています。No.37では、昨年「大聖堂建立60年」を迎えた立正佼成会を取り上げています。まず同センター長の井上順孝氏（國學院大學名誉教授）から本会の歴史についての紹介があり、つぎに当研究所の西康友主幹が出演し「仏教系新宗教が法華経を重視するのはなぜか」について解説しています。宗教界の“いま”に興味と関心をお持ちの方はぜひ「RIRCチャンネル」（https://www.youtube.com/@rirc2197）をご視聴下さい。

所報　CANDANA　300号
令和７年１月15日発行
発行所／中央学術研究所　発行者／橋本雅史
〒166-0012　東京都杉並区和田1－2－1
電話（03）3382－5687　FAX（03）3381－9771
https://www.cari.ne.jp/

チャンダナ

栴檀（candana）とは、印度に産する香木で、紫、赤、白などの種類があるが赤を最上とする。熱病を治す効能があるので与楽（よらく）ともいわれ、楽を与えるという。香気が非常に高いので、一葉開いても四十由旬（ゆじゅん）の悪臭を消すと伝えられている。